

モグラの泥せんぼん

2009.04.14



モグラは、今日も熱心に 穴を掘っていました。
ぐんぐん ぐんぐん 穴を掘っていました。

夕方までには、それは それは 深い穴が 掘れました。

夕陽を背に 汗を拭きながら、モグラは、
モグラドリンクを 一杯、ぐいっと 飲み干しました。

たしかに、この達成感は、なにものにも 替えがたいもの。

けれども、こんなに 立派な穴が掘れたというのに、
モグラの心には、どこか 穴が空いているのです。

それは、どんなに深い穴を掘っても、
埋まるものではありませんでした。

まだ足りない。
まだ足りない。

誰かが、モグラの耳元で、ささやくのです。

モグラは、ぐるんぐるんと アタマを振って、
「まだ足りない」という その声を、振り払いました。

明日は、休日です。

モグラは、キツツキのところへ行くことになっていました。

キツツキは、対象こそ違えども、
穴を空けることに関するプロフェッショナルです。

そのキツツキから なにか 学べるものがあるに違いない。

そう思ったモグラは、その匠の技を 見学させてもらえるよう、
怪訝な顔をするキツツキに 頼み込んだのでした。

キツツキの技術は、素晴らしいものでした。

キツツキから学んだことを 活かし、
モグラは また どんどんと 穴を 掘り続けました。

まるで 穴の中にキツツキが入ったかのように、
モグラは ぐんぐんと 穴を 掘り続けました。

しかし、一日の穴掘りを 終わると・・・
夕陽の中、モグラの耳元で 誰かが ささやき始めます。

まだ 足りない。
まだ 足りない。

モグラは、ぎゅっと くちびるを かみしめました。

次の休日を使い、モグラは、
元・工事現場作業員の開催する『穴掘ワークショップ』へ
参加しました。

さすがは、元・工事現場作業員。
動きに無駄が ありません。

モグラは ふむふむと 関心しながら メモを取り、
実技の時間には、カリスマ作業員から 直接指導を受ける、
という幸運にも 恵まれました。

とても有意義な一日でした。

翌日、モグラは、ワークショップで学んだことを 確認しながら
新しく 穴を 掘り始めました。

おお、これは すごい。

この華麗な手さばきは、
まるで カリスマ工事現場作業員が のりうつたかのようにです。

夕陽の中で飲む モグラドリンクが
いつもよりも 美味しく感じられました。

が、モグラの耳には・・・
またもや、例のささやきが 戻ってくるのです。

まだ、足りない。
まだ、足りない。

モグラは 下を向いて、
手のひらにできたマメを 指で なぞりました。

モグラは、さらに、努力に 努力を 重ねました。

努力の甲斐あって、
モグラの穴掘りの腕には どんどん 磨きがかかりました。

たくさんの、良質な穴が 出来上がりました。

それでも、やはり・・・

まだ、足りない。
まだ、足りない。

どこから やってくるのか、
その ささやきは、止まることはありませんでした。

ある日の夕方。

土手に腰掛けて モグラドリンクを飲んでいる モグラの肩に、
蝶々が 止まりました。

ねえ、モグラさん。
モグラさんって、穴掘りが 上手ね？

ええっ？

モグラは、びっくりしました。

知ってるだろ？
ぼくは、穴掘りが とっても下手なんだよ。
だって……

かわいい蝶々が じっと見つめるので、
恥ずかしがりやのモグラは、もごもごと 口ごもりました。

すると、蝶々は ころころと 笑いました。

あら、モグラさん。
穴を掘るの、こんなに上手なのに？

ほら、ご覧なさいよ。

蝶々が モグラの肩から 飛び立ち、
モグラの視線を 土手の下へと誘導しました。

あそこでは、井戸が出来たし。
あちでは、蛇さんのおうちが 出来たわ。

あの蛇さん、赤ちゃんがおなかにいるから 自分で穴を掘れなくて
困っていたのよ？
モグラさんに、とっても感謝していたわ。

蝶々は、にこにこしながら 飛び回りました。

見て、見て。
あっちの穴、こっちの穴。

リスのご夫婦も、冬の間、木の実を隠しておける貯蔵庫が出来た、
って、すごく 喜んでいたし。

モグラさんが 掘ってくれたおかげで、みんなの生活が 楽になったのよ？

モグラは、まだ 口を もごもごさせていました。

まだ 足りない。
まだ 足りない。

そんな声に お尻を叩かれるように、懸命に掘り続けた穴だけれど、
その穴が その後 どうなっているかなんて
考えたこともなかったのです。

そこへ、ウサギが ぴよんぴよん やってきました。

やあ、モグラくんに、蝶々くん。
ごきげんよう。

モグラくんは、毎日 汗を流して 穴掘りに励んで…
よっほど、穴を掘るのが 好きなんだね？

えええっ？

モグラは さらに驚きました。

ぼく、穴掘りが 好きなわけじゃ…

そんなモグラの言葉に、
ウサギは 長い耳を ぴくぴくさせました。

えええ？

モグラくん、穴掘りが 好きなんじゃなかったのかい？

毎日 毎日、穴ばかり 掘っているんだろ？

せっかくの休日を潰して、

あっちへこっちへ 穴掘りの勉強しに行ってるんだろ？

好きでもなければ やってられないと思うけどなあ。

モグラは、短い首を かしげました。

うーん。

そうなのかなあ。

ぼく、自分が 穴掘りを 好きかどうかなんて、

考えてみたこともなかったよ…。

蝶々が、また ひらひらと、モグラの肩の上に 戻ってきました。

あら、私も、

モグラさんって、穴掘りが 好きなんだとばかり思っていたわ。

毎日 打ち込めるものがあって いいなあ、って 思っていたのよ？

そうだよ、モグラくん。

こんな言い方したら 悪いけど、

ぼく、穴を掘るってこと自体に、興味が持てないもの。

毎日 穴を掘れ、って言われたら、うんざりしちゃうよ。

ウサギは、ぼんぼりのようなシッポのついたお尻を ふりふりして

笑いを誘いました。

蝶々は また ころころと笑ったけれど、

モグラは 笑えませんでした。

だってさ。

ウサギくんは、足が速いから いいじゃないか。

ウサギくんは カッコいいんだから、穴なんか掘らなくたって…

モグラは、しょぼん、と 下を向きました。

あら、モグラさん、なににってるの？

蝶々が、大きく羽ばたきながら、モグラの目の前に 移動しました。

あなた、今年の 結婚したいオトコ ナンバーワン なのよ？

なんだって？

なんだって??

蝶々の衝撃的な発言に、
モグラと ウサギが いっぺんに 飛び上がりました。

いま、「地道にコツコツ働くオトコ」っていうのが
ウケてるんだから。

蝶々は、ひらひらと 踊りながら、
今度は ウサギの肩に 止まりました。

うん、そうだな。

ちょっと 悔しいけど、ぼくも そう思うよ。

黙々と穴を掘る作業なんて、飽きっぽいぼくには、無理だよ。
モグラくん、カッコいいぜ。

ウサギは、勢いよく 立ち上がると
モグラの肩を ぽんと 軽く叩き、
右耳を 大きく曲げて、ぴょんぴょんと 森へ帰っていきました。

そうよ、カッコいいわよ。

蝶々も、最後に いちど、モグラの鼻先に ふわっと 花粉を散らして、
お花畑へと 戻っていきました。

ひとり 土手に残されたモグラは、ぽかん、と 空を眺めていました。

ぼく、穴を掘るの、好きなのかなあ・・・

モグラには、わかりませんでした。

ぼく、穴を掘るの、好きなのかも・・・

モグラは、なぜか ぽっと頬を染めると、
すっかり忘れていたモグラドリンクを、ぐいっと 飲み干しました。

まだ 足りない。
まだ 足りない。

耳元では、まだ 誰かが ささやいているようでした。

でも、もう モグラは
その言葉に 胸を締めつけられることは ありませんでした。

よし、明日はお休みだ。
久しぶりに、キノコ採りに行こうかな。

もぐらは、ウサギのまねをして、
ぴょん！ と 勢いよく立ち上がろうとして・・・

バランスを崩し、前に つんのめりました。

へへへ。
慣れないこと、するもんじゃないな。

モグラは、ぽりぽりと アタマを搔いて、
ヘルメットとモグラドリンクの空き瓶を拾い上げ、歩き始めました。

そんなモグラを、夕陽が 優しく 包み込んでいました。